

明清通俗文芸にみる「雪冤」と巡察御史

辻
リ
ン

はじめに

明清通俗文学の作品の中には、犯罪や事件をテーマとするミステリ仕立ての作品が数多く見られる。中国古典のミステリといえば、十三世紀はじめ、南宋の桂万榮によって編まれた裁判実話集『棠陰比事』以来、北宋の名裁判官包拯の裁判説話を収集し、明末に刊行された『龍図公案』⁽¹⁾にいたるまで、錯綜する事件をみごと処断する名裁判官の活躍に焦点を絞った、いわゆる公案物が主流をなす。これらの作品においては、神智を有する名裁判がクローズアップされるのに反比例して、犯罪や事件そのものは、卑小化されてしまう。つまり犯罪や事件は裁きの対象にすぎず、それ自体の様相を、臨場感を持って描き出されることはほとんどないのである。

本稿で取り上げる「雪冤」を題材とする作品には、確かに冤罪を晴らすという内容であるが、いわゆる公案物にみる名裁判官の明断に焦点を当てて描くのではなく、禍に遭う主人公がさまざまな苦難を経ながらも、科擧に及第し巡察御史になり、自らの冤罪を雪ぎ、最後は離散した恋人（または家族）とめでたく大団円という流れを描くものであ

る。これまで、これらの作品は、公案物（たとえば後述する寶娥冤物語）、または才子佳人物と見做されて、「雪冤」という題材にはほとんど注目されてこなかった。しかし、このような特徴を持つ作品は明清時代の各ジャンルの文芸作品に取り上げられ、戯曲、小説など数多く伝わっている。厳密には公案物でもなく才子佳人物でもないことが明らかである。

従来の定説では、このような雪冤題材の作品のうち、悲劇な結末を描く元雜劇を高く評価され、明の伝奇は新鮮みに欠けるなどといった理由で、あまり評価されないのがふつうであった。確かに、パターン化になる一群の作品であるが、しかし、中国の庶民の生活実態を窺うことのできる貴重な資料価値を持つと言えよう。しかも巡察制度についてもその実態を垣間みることができ、当時の社会の様相も見うろと考える。

共通の型を持つこれらの作品群には、複雑周到、成熟したエンターテインメント文学の表現技法を、縦横に駆使した物語的展開から見ても、そこに織り込まれる問題意識や諧謔性あふれる人間模様から見ても、興味深い存在である。ことに明末清初に成立した作品は十六世紀末から十七世紀初めにかけての明末デカダンスの雰囲気濃厚に漂わせている。さらに注目したいのは、地方官僚の監察と司法の公正のためにあつたはずの巡察御史（厳密には「巡撫」と「巡按御史」とがあり、また、王朝によって官職名も異なるが、本稿では便宜上「巡察御史」と称する）が、これらの作品の中に必ず登場し、それも自ら（または家族）の冤罪を晴らすという点である。このような一見して非合理的で「史実」と合致しない設定を採る作品が、これほど多く刊行されたことは、それなりの観（聴）衆があり、民衆に歓迎された題材であることの裏返しとも言えよう。明代地方人事体系における監察権の伸長に関しては、明代制度構成の一大特徴として、社会史の視点からよく論じられている。²⁾しかし通俗文芸の題材とこの制度との関わりに注目して検討することがほとんどないようである。そこで本稿では、かような雪冤題材をもつ通俗文芸において、明代の

官僚制度およびそれによって生み出した社会が、いかに描がられているか、両者がいかなる影響関係があったかという問題に焦点を当てて検討してみたい。

一 雪冤題材の系譜

『中国制度史』によれば、中国における成文法の成立はいつの頃か不明であるとしつつ、『左伝』昭公六年、叔向が子産に諭る書にある文を引き、その時代にすでに刑について言及があったとしている。⁽³⁾ 中国の文学において、犯罪、裁判については『詩経』や『史記』などにも多くの記述があることが知られている。ここでは本稿と関わりのある冤罪に焦点をあて、六朝時代の『搜神記』に例をとろう。「淳于伯」の話は、

晋元帝建武元年六月、揚州大旱、十二月河東地震、去年十二月暫督運令史淳于伯、血逆流上柱二丈三尺、旋復下流四尺五寸、是時淳于伯冤死、遂頻旱三年、刑罰妄加、群陰不附、則陽氣勝之、罰又冤氣之応也（卷七）

という冤死の話である。誤った裁判によって処刑され、その無実のゆえに不思議が起こる。「東海孝婦」（卷十一）も冤死し、ために三年不雨という事態を引き起こすという。

このほか、『太平広記』卷一七一、一七二には「精察」と題されてそれぞれ十八名、十三名計三十一名の透徹した眼識によって解決されるさまざまな事件が列挙される。一例を挙げよう。「顔真卿」と題して、

顔魯公真卿為監察御史、充河西右軍覆屯交兵使。五原有冤獄、久不決、真卿立弁之、天久旱、及獄決乃雨、郡人

呼御史雨（卷一七二、出『伝載』）

冤獄の内容は記されないが、解決したところ久しい旱魃であったのが、慈雨に恵まれたという。人事と天が呼応しあっていることが注目されたい。

宋代になると、商業経済の発展にともない都市が繁栄し、庶民階層が勢力を得て、庶民文芸が盛行する。その愛好を受けた語り物の世界に公案物を取り上げられた。『醉翁談録』に公案の演目が十六記されている。これについて胡士瑩『話本小説概論』に解説と考証がある。⁽⁴⁾

元代になると、元雜劇のなかに公案劇とよばれる作品群が現れる。それらは数量にしてほぼ全作品の一割を占めることから、当時いかに大衆に歡迎されたか知られよう。現存するものでは次の十八種がある。

寶娥冤、臨江驛、胡蝶夢、魯齋郎、後庭花、生金閣、救孝子、魔合羅、灰闌記、勘頭巾、殺狗勸夫、陳州糶米、硃砂担、合同文字、神奴兒、盆兒鬼、留鞋記、酷寒亭

戲文では、小孫屠役興遭盆吊、殺狗勸夫の二種のみであるが、題名だけ残っているものに、錯勘屍、曹伯明勘賊などがある。なお、そのうちの『寶娥冤』『臨江驛』は冤罪題材の代表的な作品である。⁽⁵⁾このように公案劇が大量に書かれたのは当然理由がある。これについて鄭振鐸は、『五雜俎』人部四（卷八）にみえる話を引いて、次のように述べる。⁽⁶⁾

元時達魯花赤為政、不通漢語、動輒詢訳者。江南有僧、田為豪家所侵、投牒訟之、豪家賂之訳。既入、達魯花赤問訳、僧訟何事。訳曰、僧言天旱欲自焚以求雨耳、達魯花赤大賞賛、命持牒上、訳業別為一牒、即易之以進、覽畢

判可、僧不知也。出門、則豪已積薪通衢、數十人昇僧、昇火中焚之、然則從來火化之妄惑、往往如是矣。

元代は蒙古人統治の時代で、その厳しい社会状態と切り離しえない。中国人の風俗、習慣はおろか、中国語さえ知らなかった統治者たちであり、無法律、無天理の時代であるといえる。したがって翻訳官あるいは胥吏にたよる法廷の恐ろしさは、自ら焚死して昇天することにかこつけて焼き殺す話にも窺えよう。そうした社会は勢力と金銭とが法律そのものであった。そこでいくつかの型の公案物語を生み出した。ひとつは清官の断案である。勢要豪家を恐れず、正義を通す。もうひとつは明白守正の官吏が無実の平民を救うものであり、それらは当時の一般的な事実でもあったろうと指摘している。

元雜劇における公案劇には、したがって事理にくらい官、横暴な官吏も登場するし、賢明な人物、また鬼神、英雄も登場する。また、包公が登場することも注目されよう。宋代の公案ものにおいてはいく人もの裁判官が登場するが、元雜劇においては包拯にことよせることが多くなる。先にあげた十八種のうち、八種すなわち胡蝶夢、後庭花、生金閣、灰闌池、陳州糶米、合同文字、盆兒鬼、留鞋記は包待制の裁判となる。そしてその裁判は実に公明正大で、権勢を恐れず、時には皇帝親族をも処刑する。それは裁判の理想であり、民衆の願望するところであった。包拯が理想化されて正義を代表する裁判官になる。それは現実の裏がえしであること、鄭振鐸の指摘の通りであった。

総じていえば、元代以前とりわけ元雜劇『寶娥冤』『臨江驛』を代表とする同題材の作品には、主人公が思わぬ災いに遭い、生命を奪われる。悲劇の色合いが濃い物語で、その悲劇はまた不公正な裁判によるものであるとする。最後は冤罪がはれ、悪人が捕えられるが、処刑された命は生還できない。人事と天が呼応しあっていることを描かれ、『天理昭然』という言葉がよく使われる。冤罪の真相がすべて明白になったのは天の理によるのだというのであ

ろう。無実の罪に裁判官が詳細を究めようとせず、曖昧にしたからであるという。また官たるものが軽率に断獄し、情に任せて刑を用いるべきではないという。これは実は当然そうであるべきことであって、特に取り立てていうことではないはずである。改めて指摘するのは現実においてそうではなかったからであろう。このようにみえてくると、当時の裁判、あるいは裁判官に対する失望感、あるいは痛烈な風刺や皮肉がこめられていると解されよう。

二 明清通俗文学にみる「雪冤」題材

明清の小説、戯曲、弾詞、宝卷などの通俗文学に、自身または親族の冤罪を雪ぐ「雪冤」題材の作品が数多く見られる。まず明代の一大通俗文学ジャンルである伝奇作品から挙げてみると、以下の二十種以上にのぼる。

1 葉憲祖『金鎖記』

清抄本が現存する。『古本戯曲叢刊三集』にその影印本を収録している。『今樂考証』、『曲考』、『曲海目』、『曲録』などに著録がある。呂天成『曲品』では葉憲祖の撰としているが、『曲海総目提要』では撰者不明としている。高奕『新伝奇品』では袁於令撰としている。⁽¹⁾

2 王国柱『碧珠記』

『碧珠記』について、祁彪佳は『遠山堂曲品』で「能品」に分類し、「絶似袁晷公之寶娥冤、沈寧庵之合衫記」としている。「袁晷公」とは前掲1袁於令のこと、ここの袁於令作とされる「寶娥冤」は1『金鎖記』の別名であるかどうか、考証を待ちたい。ただし、この評述により『碧珠記』は元雜劇『寶娥冤』と『合汗衫』の内容が酷似していることが知れる。したがって、雪冤題材を用いる作品と判断できよう。

3 心一山人『何文秀玉釵記』

万暦年間金陵富春堂刊刻の『何文秀玉釵記』（又の名『玉釵記』『両重恩』）が現存する。中国国家図書館所蔵、『古本戯曲叢刊初集』にその影印本が収録されている。『遠山堂曲品』では「具品」に分類している。『曲海総目提要』では「本小说彈詞而作」としている。

4 季陽春『鳳簪記』

『鳳簪記』について、祁彪佳『遠山堂曲品』では、『玉釵』と同じく「具品」に分類し、「記何文秀、猶之玉釵也、不若彼更敷暢。」と評している。『鳳簪記』のテクストは伝っていないが、明の万暦前期に成立とされる胡文煥編『群音類選』巻十五に、⁽⁸⁾「留館別妓」「花園被執」「深淵救溺」「花燭成親」「棄子全英」「毀容立節」の六齣、計三十四曲が選録されている。選録された六齣の題名と「記何文秀」という祁氏曲論の紹介から、『鳳簪記』も何文秀物語を本事とし、3『玉釵記』とほぼ同じ内容を持つことが知りえる。

5 『八義双杯記』（撰者不明）

6 薛旦『喜連登』

5『八義双杯記』は万暦金陵廣慶堂刊本が現存する。又の名『喜聯登』。『遠山堂曲品』では「猶得與荊、劉相上下」と評する。『今樂考証』『曲考』『曲海目』『曲録』は著者不明としている。王森然『中国劇目辞典』では、6『喜連登』は5『八義双杯記』による改編本としている。馮夢龍『警世通言』巻二十『張廷秀逃生救父』と同話である。

7 『金釵記』（又の名『玉堂春』、撰者不明）

8 李玉田『玉鐲記』

9 『完貞記』（撰者不明）

10 『金釧記』（撰者不明）

祁彪佳『遠山堂曲品』では8『玉鐲記』を「具品」に分類し「不謂鄭元和之後、復有王三捨。」と評する。9『完貞記』10『金釧記』は「能品」に分類している。『完貞記』を「記王順卿全仿原伝、較玉鐲稍勝之」と評している。『金釧記』については「金時之狎劉小桃、似玉鐲所載王順卿事」としている。この評論により、三つの作品は馮夢龍『玉堂春落難逢夫』と同じ本事であることが推知できる。また馮夢龍の『情史類略』「玉堂春」に「好事者撰為『金釧記』。「生為王瑚、妓為陳林春、商為周鏜、姦夫莫有良。其軋折稍異」と述べている。⁽⁹⁾『遠山堂曲品』に著録の『金釧記』と同名で、同じく玉堂春物語を本事としているが、人名に異同があるので、同一作品かは定かでない。

11 沈璟『合衫記』

12 周繼魯『合衫記』

13 『白羅衫』（又名『羅衫記』、撰者不明）

14 劉方『羅衫合』

11沈璟『合衫記』は呂天成的『曲品』に収録されている。祁彪佳『遠山堂曲品』では12周繼魯『合衫記』について、「其事絕與芙蓉屏相肖、但此羅衫会合処、関目稍繁耳」と評している。この評論により、『初刻拍案驚奇』第二十七卷「顧阿秀喜捨檀那物 崔俊臣巧会芙蓉屏」と同じ本事であることが分かる。また『遠山堂曲品』の「雅品」にもう一作の『合衫記』を取り上げて、「取元人公孫合衫劇参錯而成。」と述べている。13『白羅衫』と14劉方『羅衫合』とは『今樂考証』『新伝奇品』『曲考』『曲海目』『曲録』に著録があり、いずれも元雜劇『合汗衫』と同じ本事としている。また『警世通言』卷十一「蘇知縣羅衫再合」、『初刻拍案驚奇』の「芙蓉屏」も同話である。12『合

衫記』と14『羅衫合』は版本が現存していない。13『白羅衫』は清抄本が現存、『古本戯曲叢刊三集』にこの影印が収録されている。

15 阮大鍼『春燈謎』

16 『双珠鳳』（撰者不明）

15『春燈謎』は明刊本が現存、『古本戯曲叢刊二集』にその影印が収録されている。16『双珠鳳』は版本が現存していないが、『今樂考証』『曲考』『曲海目』『曲録』に著録がある。それらの資料により、15『春燈謎』と同話であることが分かる。

17 盛際時『臙脂雪』

清抄本が現存している。『古本戯曲叢刊三集』にその影印が収録している。『今樂考証』『新伝奇品』『曲考』『曲海目』『曲録』に著録がある。

18 『繡衣郎』（撰者不明）

版本が現存していないが、『曲海総目提要』の紹介により、17『臙脂雪』と同じ本事であることが判断できる。

19 徐沁『広寒香』

『今樂考証』『曲考』『曲海目』『曲録』に著録がある。文治堂刊本が現存する。

20 『庠宮縁』（撰者不明）

董康『曲海総目提要』では「不知何人作、述巫高、山衣雲悲歎離合事」とする。

21 『珍珠塔』（撰者不明）

『今樂考証』『曲考』『曲海目』『曲録』に著録がある。清抄本が現存し、『北平図書館戯曲展覧会目録』に収録さ

れている。兪正峰『珍珠塔』弾詞と同じ本事である。

これらの作品についての評述資料から、その構想は主人公が禍に遭う↓親族離散↓科擧に合格し巡察御史になる↓自身（または家族）の冤罪を雪ぐ↓大団円という共通した型になっていることが確認できる。

前掲した二十一の伝奇作品は内容のあらすじから見ると、ほとんど先行作品の元雜劇または同じ本事を持つ小説、宝卷、弾詞などの通俗文芸より改編したものと認められる。ただ15『春燈謎』だけはこれらと成立事情を異にし、おそらく最初から阮大鍼によって書かれたと思われるが、それにしても、同類の型から逸れず、先行作品から多くのヒントを得て成ったものであることは、論を俟たない。元雜劇と比べると、伝奇では雪冤者と被冤者との家族関係に変化があり、多くは家族が離散した後に冤罪が起ることに変わっている。また先行同話の作品の元雜劇では悲劇の結末であっても、改編した明伝奇ではほとんど大団円という結末に変えている。元雜劇では雪冤者が「肅政廉訪使」のに対して、明伝奇では「巡察御史」に変わる。これは元明時代の官職名の変化によるものと思われる。この意味においても、文学作品とりわけ庶民文芸は観衆（聴衆）の好みや要請に応じて改作したので、リアルに時代を反映したと言えるよう。

ここでは元雜劇『寶娥冤』『臨江驛』を例としていくと、『臨江驛』は構想上、『寶娥冤』を踏襲していることが明らかである。雜劇では、主人公が遭った冤罪はいずれも父親が家を離れた後に起き、「肅政廉訪使」になった父親寶天章（または張天覺）は家族の冤罪を知らなかったため、「雪冤」も経緯を知ったその後いわば成り行きで行われたという設定である。また、元雜劇の二作品において、雪冤者と被冤者が父親と娘の関係であるが、娘のために冤罪を雪ぐ意識がそれほど強いものではないようである。これについて、寶天章のせりふは次のようである。⁽¹⁰⁾

我賣家三輩無犯法之男、五世無再婚之女、到今日被你辱沒祖宗世德、又連累我的清名。

娘の「犯罪」は賣家代々の面目を潰したというのである。あくまでも一族の名誉を維持し法に基づいて処理する姿勢が明らかである。対して、『賣娥冤』を本事とする前掲した明伝奇1『金鎖記』2『碧珠記』およびそれ以降の同題材の通俗文学作品群では、雪冤や仇討ちが目的となり、この目的意識が物語の伏線となっている。雪冤者と被冤者の関係がより緊密になり、ほとんど夫婦または恋人関係である。二人の離散はほかならぬ冤罪によるものであり、そのために、雪冤者は当事者の一人でもあり、当然ながら判決を下す前にすでに事件の経緯を最初から把握しているのである。つまり冤罪を雪ぐことが自らの目的意識によって行われたのである。例えば、3『玉釵記』の中で、何文秀は父親の宿敵による執拗な迫害に遭い、妻とも離散した。さまざまな苦難を経て、科挙に合格し巡按御史に任ぜられた後、真っ先に行われたことは宿敵の罪状を収集し、仇討ちすることである。5『双杯記』では、廷秀と文秀の兄弟が両親の冤罪で迫害に遭った後、兄弟ともに科挙に合格し、それぞれ常州推官と山西巡按御史になる。そこで廷秀は両親の冤罪を雪ぎ、文秀は宿敵を裁く。これらの例からも分かるように、明清の雪冤題材の作品群は、冤罪に遭う↓雪冤のために努力する↓科挙に及第し巡按御史になる↓悪人を裁き冤罪を晴らすという明らかなパターンが認められる。⁽¹⁾

元代の肅政廉訪使はまだ法の公正を重んじ、職権の私用をしない姿勢を作品から読み取れる。⁽¹⁾対して明代の巡察御史は、自らのために職権を使うというのが庶民の共通認識のように、文芸作品に取り入れられている。しかも一大作品群となっているのである。これは、裏を返せば、元明以来の監察制度の歪みをリアルに反映したと言えよう。監察

制度は前述の如く、本来公正さを目的に歴代の王朝が実施した制度であるが、しかしながらこれら雪冤題材の作品群はこの公正さを真つ向から否定していることが興味深い。

悲劇の結末からハッピーエンドに改編することによって、伝奇作品はリアリティーが失われる。元雜劇『寶娥冤』と『臨江驛』の中で、主人公は最後に冤罪が晴れたが、悲劇的な運命であったことは変わらない。寶娥は冤罪で生命を奪われ、その下女翠鸞は死には至らないが、悪しき男に嫁がされたあげく寡婦になる。しかし明伝奇では、このような悲劇の色合いが濃い物語の中に、男女主人公の出会いのプロットを付け加え、男女が離散する悲痛さを醸し出し、最後では悲喜ごもごもの大団円で終わる設定に変わる。

このような改編は同話の『金鎖記』の中でも見られる。元雜劇では、寶娥が処刑後に、仲夏六月の空から大雪が降り、人間の怨嗟に天が呼応するという。寶娥の悲劇は不正な裁判という現実を批判するものである。対して『金鎖記』では、処刑しようとしたところで雪が降りだったので、処刑官がそれを見て冤罪だろうと悟り、一旦執行を取りやめた。その後、母親の提言により父寶天章は娘と再会する。寶天章は事件を再審し、寶娥が釈放される。悪人の張驢兒は雷に打たれて死ぬという因果応報の話も付け加える。さらには、蔡婆には商売をする息子蔡昌宗があり、昌宗が科挙試験の水路の途中で舟が覆し龍女に救われる。昌宗は龍女と三年の婚姻生活を送った後、人間界に返り科挙試験で狀元となる。最後に夫妻が船の中でめでたく再会するという紆余曲折な設定になる。

このような強引的な改編の理由は、雜劇と伝奇における脚本の文学的特徴の異同、時代変化による社会の審美感の変化、および著者と観衆の考えの変化によるものと考えられる。

ここまで主に明清時代の雪冤題材の特徴をみてきた。雪冤題材はとりわけ明伝奇で多く作られ、一大作品群となることを確認できた。この流れを汲み、清の半ば以降近現代まで、多くの地方劇や語り物芸能などにも同題材の作品が

みられる。以下に題名とかかる文芸ジャンルのみを挙げる。⁽¹²⁾

「金鎖記」 宝卷、京劇、河北梆子、又名「六月雪」

「臨江驛」 京劇、評劇、紹興文戲

「何文秀」 彈詞、宝卷、越劇、閩劇、莆仙戲、廬劇「王蘭英祭靈」、泗州戲「夜祭」

「空印盒」 京劇、絲弦戲

「玉堂春」 彈詞、京劇、豫劇、梆子戲等、又名「萬花船」

「奇巧報」 京劇

「白羅衫」 宝卷、京劇、崑曲、晉劇、徽劇、川劇、秦腔、河北梆子

「回杯記」 越劇、評劇、道情「張廷秀私訪」、豫劇「王二姐思夫」

「奇双会」 京劇、崑曲、豫劇、徽劇、楚劇、漢劇、湘劇、川劇

「五女拜寿」 越劇、黃梅戲、秦腔、豫劇

「陳三兩」 京劇、越劇、四平戲

「謝瑤環」 京劇、越劇

「金雀扇」 秦腔、又名「審姜礼」

「胭脂宝裙」 京劇、川劇、漢劇、湘劇、徽劇、河北梆子、桂劇「胭脂雪」

「双珠鳳」 彈詞、宝卷、京劇「選花樓会」、錫劇、越劇、閩劇、廬劇、淮劇、五音戲

「三進士」 京劇、川劇、漢劇、湘劇、滇劇、徽劇、秦腔、河北梆子、河北絲弦

「珍珠塔」 彈詞、宝卷、京劇、錫劇、川劇、徽劇、秦腔、黃梅戲、廬劇、越劇

〔双合印〕 宝卷、鼓詞、秦腔、晋劇、川劇「広平府」、漢劇、湘劇

〔春香伝〕 弾詞、粵劇、越劇、京劇、黄梅戲

〔玉連環〕 弾詞、宝卷、越劇、又名「李翠英」

〔鴻鸞喜〕 京劇、又名「豆汁記」

〔羅帕記〕 宝卷、黄梅戲、揚劇

〔玉鐲縁〕 弾詞、桂劇

〔陷巢州〕 廬劇、又名「人不如狗」

〔四進士〕 京劇、皮黄、秦腔

〔卷席筒〕 曲劇、道情、秦腔、豫劇、又名「斬張蒼」

これらの演目は先行作品と比べると、構想上、禍に遭う↓離散↓主人公が巡察御史になる↓家族（または自身）の冤罪を雪ぐ↓大団円という型は変わらない。内容は官僚や司法の不正を暴くのみならず、本来ある先行作品のあらすじの中に、社會の風習、倫理道德、人間模様などにも焦点をあてるようになる。例えば『鴻鸞喜』は出世した夫が糠槽の妻を捨てる話、『羅帕記』は夫が悪人に唆されて懷妊の妻を家から追い出す話、『奇双会』は妻が夫を殺害し兒女をも迫害する話、『卷席筒』『金雀扇』は継母（叔母）が家財を略奪するために甥を迫害する話、『三進士』は嫁が姑を殺害する話である。これら世間人情を描く話も従来ある型の中に綯い混ぜる。

また冤罪に遭う者（主人公）の性別の設定も変わる。元雜劇の二作はいずれも女主人公が禍に遭い、父親が肅政廉訪使になることによって冤罪を晴らすことができた。これは元代という乱世の中で漢族の女性が低い地位におかれることが原因の一つと思われる。女性の生きづらさも反映する。また裏を返せば、社會の弱者は親族に権力者がいなか

れば救えないという現実の反映とも言えよう。明末清初の伝奇の中では、主人公が男性という設定が大多数を占める。男主人公が御史になり、自ら（または家族の）冤罪を晴らすというパターンは前述の通りである。これは男性による創作も原因の一つと考えられる。対して、清の半ば以降は、女性が御史に任ぜられ、その権限をもって家族（恋人）の冤罪を雪ぐ設定が多く現れる。例えば、伝奇『双珠鳳』は男主人公が科挙に合格し御史になるという旧套に反して、主人公霍定金が男装して科挙に合格し、才能が皇帝に認められ御史になり、恋人の文必正の冤罪を晴らすことを描く。秦腔『金雀扇』は姜定生が継母符氏の迫害で川に落される。符氏は定生の叔父姜礼が甥を殺害したと誣告する。姜礼は殺人の罪で投獄される。落水した定生は人に救われて科挙に合格し、按察になる。離散した妻も男装して科挙に合格し御史になる。夫妻二人で事件を再審し、叔父の冤罪を晴らす。このように女性が救われる側から救う側に変わるのは、この時期、弾詞などの通俗文芸に女性著者が増えたことが理由の一つと思われる。

明清伝奇では、例えば『何文秀玉釵記』『金鎖記』『双珠鳳』『玉連環』など、男の主人公は苦難の中でふたりの女性と出会い、最後は「一夫二妻」大団円という設定を採るが、清末民国年間以降の地方劇ではほとんど改編される。『玉釵記』を例にあげよう。書生何文秀は妓女の劉月金を気に入り南京の妓院に長居する。その後、何家の宿敵に無実の罪を着せられ一家皆殺しをされる。何文秀は指名手配されたので蘇州に逃げることにする。別れ際に、文秀は妓女劉月金と夫婦の約束をし、月金は玉釵を証として文秀に贈る。また避難の途中で王太師の令嬢王瓊珍と出会い夫婦になる。その後またしも悪人に無実の罪を着せられ、妻とも離散する。のち科挙試験に及第し巡察御史になり、宿敵の悪人を裁き、妻の瓊珍と再会する。瓊珍は文秀と月金の約束を理解し、月金を妓院から迎えさせる。その後、一夫二妻めでたく大団円になるという。

対して、清末民国以降の同話の宝卷や越劇では、前半の南京の妓館を遊び、妓女劉月金と出会い、別れ際に月金が

玉釵を贈るといふくだりが、勉学のため南京にいくことに改編される。このように妓女劉月金の登場がないゆえ、明伝奇のような一夫二妻大団円という結末も変わる。また越劇では、文秀の父何棟は最初から死去したという設定になっている。総じて言えば、何文秀を「遊冶少年」から勉学に励む好青年に変えた。またこの改変によって、後半で遭遇した数々の苦難もより観衆の涙を誘うという趣向を凝らした工夫がみられる。

三 明清通俗文芸にみる雪冤題材と巡察制度

ここまでみてきたように、このような雪冤題材の一大特徴は、主人公の運命の転換点となるのが科挙に及第し「巡察御史」になるという設定である。これはいうまでもなく、現実の社会や政治のシステムのきしみと呼応して生まれたいものにほかならない。ここで、こうした作品群を生むにいたった明という時代とりわけその巡察制度の概観をたどってみよう。

唐代の巡按御史や元代の御史台の存在からも分かるように、明代以前にも監察官が地方官に対する監察活動のため地方を巡視し、あるいは地方に常駐した例がなかったわけではない。しかし全地方官の人事を左右するまでに監察官の権限が強化されたのは、明代に始まるものであった。

明代の官僚制度は、監察官の権限が非常に強化された点に特徴があると言えよう。人事の最高決定権を行使するほか、監察官には人事行政への監察が奨励されていた。さらに、中央から派遣された巡按御史には、地方官の人事を左右する考察の権限が与えられてきた。明史にみる都察院の右副都御史の肩書きを持つ巡撫と巡按御史が地方の実権を掌握していく過程は、まさに監察権の全面的な抬頭と言えよう。特に正統年間（一四三六―一四四九）から、巡按御史は按察使に代わって地方巡察の任務を専担すると同時に、按察使に対する弾劾権さえも行使することとなった。従

七品の巡按御史は、地方行政や監察の中枢役たる按察使・布政使を上回る権限を持ちつつ、巡撫を牽制する役割を担ったのである。また巡按の日常的な監察活動を人事に直接反映する、いわゆる不時考察の例がより強化される。さらに嘉靖二十一年（一五四二）、考察によって「貪酷」非違事実を摘発された場合、従五品以上の官僚は弾劾、六品以下はただちに拏問されることになった。考察制は担当者・実務処理などの制度的な面の変化とともに、地方の行政体系に対する影響力も際だって増大していったのである。

この一連の経緯から分かるように、明政府は地方官の人事運用を撫按の監察に任せ、絶対的権限を与えていった。巡察強化に対する政府の公式的立場は、貪官の摘発と民生安定という側面に重点が置かれている。政府側によってもう一つ、巡察支持の重要な根拠として挙げられたのは、巡撫と巡按御史の監察活動が「下情上達」の通路である点である。洪武年間以来、「広く且つ密かに現地の輿論を収集する」という建て前の上で、巡按御史の情報収集活動が奨励されてきた。撫按に情報収集活動を奨励したことは、考察のプロセスに地方の様々な勢力が介入する端緒にもなった。一年ごとに派遣される巡按御史の監察活動は、中央と地方を直接つなげる接点と見なされていたのである。巡按御史の存在が、既存の地方官僚組織の秩序を破壊するまで強大化し、巡按御史の権限が布政使や按察使を凌ぐまで増大していた。たとえば清代の史家趙翼は、『明史』『循吏伝』の序文を纏めた上、次のように述べている。

洪武以来の吏治は百餘年の間、澄んで清らかであった。英宗・武宗の際、内外の変動が多かったが、貪残な官僚がなかったため、民心は土崩の虞がなかった。嘉隆以後、吏部の考察法はいたずらに具文となり、人々は自ら顧み重んずることがなくなった。撫按の権限が重んずることがなくなった。撫按の権限が重すぎて、挙劾はただ賄賂のみが問題になり、みんな貪墨をもって上司を奉じた。ここから吏治は日々やぶれ、民生は日々苦しむ。ついに、国

が滅亡するに及んだ。⁽¹⁴⁾

巡察を通じて貪吏を肅正して民生を守る、という巡察強化の建て前は現実的にはそれほど成果を上げることにはなかった。巡察が強化するに従ってその公正性は問われ、度重なる巡察が結局、民力の疲弊を招くだけである、という批判は常に提起されていたのである。四十年間にわたる嘉靖年間を通して、巡察による様々な弊害を憂う声は高まる一方であった。

かような制度によってもたらされた社会現実、明末清初の通俗文芸にみる雪冤と巡按御史と一致する。つまり、絶大な権限を持つ巡按御史でなければ、冤罪を雪ぐことができないというのが、当時一般的な認識であったろう。同時に、司法の公正のために設立したはずの監察制度に対する否定と風刺にもなる。

まずは、監察官の選抜制度に対する否定である。元代に設立した按察司は地方官経験者で、かつ道德面で高尚な「名士」から選抜することと規定している。前述した元雜劇の二作に登場する竇天章と張天覺はいずれも「廉潔奉公」と賞賛され任ぜられたという設定もこの制度に合致する。明代の監察法にも次のような規定がある。⁽¹⁵⁾

凡都察院、各道監察御史並首領官、按察司並首領官、自今務得公明廉重、老成歷練之人、奏請除授、不許以新進初仕及知印、承差、吏典出身人員充用。

同様に「經驗」「廉潔さ」を重視していたはずであったが、しかし、前掲した明末清初の雪冤題材の作品には例外なく、科挙試験で状元になった主人公が権力者（または皇帝）に気に入られ、すぐ「巡按」に任ぜられるという設定に

なっている。

つぎに、監察官の「回避制度」に対する否定である。これに関して、明代には次のような規定がある。⁽¹⁶⁾

凡監察御史、按察司追問公事、中間如有仇嫌之人、並聽移交陳說回避、若朦朧懷私按問、致有違枉者、於反坐上加二等科罪、所問雖實、亦不応科斷。

という規定から分かるように、回避制度とは本来、司法の公正のために、監察官の私情をはさむことを防止するために、出身地への赴任や親族の案件を回避することに対する規定と罰則である。しかし雪冤題材の作品はすべてにおいて、自身（また家族）の冤罪を晴らす、すなわち公権の私用という設定になっている。伝奇『玉釵記』を例にみてみよう。

何文秀の父何棟は山東提學副使に在任中、寿陽県の知県陳練の息子が科挙試験の不正を判明し、その合格を取り消した。陳練は南京府巡察御史に昇進すると、何家に凄まじい報復をし、無実の罪を着せて一家皆殺しをする。最後に文秀が科挙試験に及第し巡察御史になると、これまた絶大な権力を利用して、すぐ宿敵を裁くというのである。

一見非合理的で史実離れであるが、実際は明末の官僚制度の混乱、官僚の腐敗をリアルに具現している。そういう社会状況にあった伝奇の撰者にとって、私利私欲の追求に明け暮れて経世の本分を忘れた汚職官吏などは、ありのままに描かざるを得ない対象として映ったのであろう。かつて世界でも類のない厳正さを誇っていたはずの科挙の試験にさえ賄賂が横行するようになったこと、腐敗しきった官僚界など、明末社会の断面をみごとに浮彫にするのである。このような史実とかけ離れた設定も、作品の変化過程と関連付けて考え、時代ごとの特色とあわせて解釋すれば

理解しやすくなるのであろう。

おわりに

ここまで明清通俗文芸における雪冤を題材とした作品とこれらの作品が生まれた明代の官僚制度と社会背景をみてきた。これらの作品についての評述資料から、その構想は主人公が禍に遭う↓恋人（家族）離散↓巡察御史になる↓自らの冤罪を雪ぐ↓大団円という共通した型が確認できた。この型の中に、恋あり、殺人あり、生のエネルギーが過剰に奔騰するさまが、鮮やかに活写されている。この溢れかえるエネルギーは、根底的に非士大夫的なもの、有り体に言えば市井に生きる庶民のものにほかならない。街の盛り場で民衆を相手に語られた通俗文芸は、いうまでもなく、民衆のなかから生まれ民衆によって育まれたものであった。

明代の通俗文芸の作者（編者）は、概ね士大夫階層の末端に連なる文人たちであったが、彼らは、こうした民衆的な語り物の精神を吸収しつつ、生のエネルギーあふれる物語世界を具現したのである。こうした作品群に顕著にうかがえるのは、リアリズムの手法を駆使して、既成の体制や現実秩序に対する否定や風刺などのゆさぶりをかける。以上のように、明末清初の通俗文芸における雪冤を題材とした作品を検討しつつ、総体として、古びた社会・政治システムの転換期にあった明末の時代の気風を現出させることが、本稿の目的である。

主要参考文献

- 1 李修生主編『古本戲曲劇目提要』、文化芸術出版社、一九九七年。
- 2 董康等校訂『曲海総目提要』、人民文学出版社、一九五九年。

- 3 葉德均『戲曲小説叢考』、中華書局、一九七九年。
- 4 莊一拂『古典戲曲存目彙考』、上海古籍出版社、一九八二年。
- 5 郭英德『明清傳奇叙録』、河北教育出版社、一九九七年。
- 7 澤田瑞穂『増補 宝卷の研究』「宝卷提要」、国書刊行会、一九七五年。
- 8 車錫倫『中国宝卷総目』、北京燕山出版社、二〇〇〇年。

注

- (1) 公案物とは、犯罪および裁判を主題とする作品のことである。公案とは公府の案牘のことであり、法令によって是非を判断することも公案という。禪家において公案というのは、求道者に提示して参究すべき問題のことを指しているが、ここという公案物の公案と直接に関わるものではない。中国通俗文学史のうえで用いられるのは宋代に始まると思われる。宋代の都市繁昌記である『都城紀勝』『夢梁録』『古杭夢遊録』などの「小説」の項目の下に「説公案」と見え、宋の羅燁『醉翁談録』に「公案」を語る演目が挙げられている。
- (2) 『宮崎市定全集』13『明清』を参照、岩波書店、一九九二年。
- (3) 「夏有乱政而作乱刑、商有乱政而作湯刑、周有乱刑而作九刑」。呂思勉『中国制度史』第十七章「刑法」、上海教育出版社、一九八五年。
- (4) 『話本小説概論』第二四九頁、中華書局、一九八〇年。
- (5) 公案劇については、莊司格一『中国の公案小説』参照、研文出版、一九八八年。
- (6) 『中国文学研究』第三卷「元代公案劇産生の原因及其特質」、作家出版社、一九五七年。
- (7) 蔣星煜、齊森華、趙山林編『明清傳奇鑑賞辞典』は高奕『新伝奇品』により、袁於令撰としている。
- (8) 中華書局影印本、一九八〇年。
- (9) 『情史類略』、岳麓書社、一九八三年。
- (10) 閔漢卿『寶娥冤』第四齣。臧懋循編『元曲選』第四冊第一五一三頁、中華書局、一九五八年。
- (11) 例えば、寶天章の登場に「從今後把金牌勢劍從頭擺，將濫官汚吏都殺壞，與天子分憂，萬民除害」というせりふがある。前掲注

10、第一五一七頁。

- (12) 傅惜華『清代雜劇全目』（人民文学出版社、一九八一年）、『中国曲学大辞典』（浙江教育出版社、一九九七年）、『中国劇目辞典』（河北教育出版社、一九九七年）を参照。

- (13) 『万曆会典』卷二一〇、都察院、「出巡事宜」…「国初、監察御史、及按察司分巡官、巡歷所屬各府州縣、拮抗行事。洪武中、詳定職掌。正統間、又推広申明、著為憲綱、及憲体、相見礼儀。事例甚備。迨後按察司官、聽御史劾劾、而御史始專行出巡之事」。

- (14) 趙翼『廿二史劄記』卷三三、明初吏治「且是時、吏部考察之權最重。（中略）一時風氣如此、故為守令者、無不潔己愛民、恥于清議。循吏伝序云…洪武以來、吏治澄清者百餘年、当英宗・武宗之際、内外多故、而民心無土崩之虞、由吏鮮貪殘故也。嘉隆以後、吏部考察之法、徒為具文、而人皆不自顧惜。撫按之權太重、挙劾惟賄是視、而人皆貪墨以奉上司。於時吏治日偷、民生日蹙、而国亦遂以亡失」。

- (15) 申時行等重修『明会典』卷二百九「急缺選用」第一〇四五頁、中華書局、一九八八年。

- (16) 『皇明制書』「憲綱」二十七条第一七六頁、上海商務印書館、二〇〇三年。

* 本稿は早稲田大學特定課題研究助成費（2020C-034）による研究成果の一部である。